

片腕の男が闇の中から現れて、不意にタカシに声をかけた。

それはタカシがナイトクラブで仕事を始めて二度目の新月の夜のことだった。あまりにも突然のことだったので、タカシは思わず大きな声をあげてしまった。

「そんなに驚かなくてもいいだろ」と男は言った。「小さな声で何度も呼びかけていた。でもアンタはまったく気づかなかったんだ」

男は大柄で、胸板も厚く、そしてタンクトップを着ていた。左腕は闇の奥に吸い込まれてしまったかのように、完全に欠落していた。タカシは店から持ち出した大型の業務用ゴミバケツを両手に持ったまま、ただ呆然と男を見上げていた。

「今、何時かな？」と男は笑みを浮かべながら言った。「見てのとおり、アタシには左腕がないんでね。腕時計がはめられないんだよ」

この路地の先の公園に大きな時計台があるじゃないか？ そう言いたかったが、面倒は避けたかったので、タカシはゴミバケツを地面に置き、汚れた手で服を汚さぬように慎重に腕をたくし上げて時計を見た。もうすぐ三時、二時四十五分ですよ、とタカシは答えた。

「ありがとつ」と男は小声で言った。「いい時計だね、それ。恋人にでももらったのかい？」

タカシは不審に思った。この片腕の男はカズミのことを知っているのか？

男はタカシの感情の変化を敏感に感じ取ったようだった。「いや、いや。ただの当てずっぽうさ。気にしないでくれよ」

タカシはそれ以上男に関わりたくなかった。逃げるように踵を返した。

「ちょっと待ってくれ。ひとつお願いがあるんだ」と背後から片腕の男が言った。

タカシは怪訝そうな顔をして振り返った。

「ハグをしてくれないか」と男は言った。「ほんの少しでいい。アタシをハグしてくれないか」

タカシは呆れて鼻で笑った。どうして俺が見ず知らずの片腕の大男を抱きしめなきゃならないんだ？

勘弁してくれ、とタカシは冷たく言い放った。そして二度と男のことを振り返ることなく、バケツを抱えて店に戻った。

左腕に腕時計がはまっていないことに気づいたのは、朝、店を出るときのことだった。

タカシは慌てて店に戻った。炊事場、洗面所、コーヒーを囲んだ店のテーブルなど、考えられるところはすべて見て回った。しかし、時計は何処にもなかった。あの時計はカズミが病室で、タカシの誕生日プレゼントにくれたものだ。私はこうしてずっとあなたの腕で時を刻むわ、とカズミは言った。時計はその後も時を刻みつづけたが、カズミの美しい笑顔はあのままあの瞬間に張り付いたままだ。

彼女は二度と退院することはなかった。

途方に暮れて、タカシは店の丸椅子に座り込んでしまった。滴り落ちるほど汗が噴き出してきた。おかしいな、そんなはずはない、と強く思った。最後に時計を見たのは、あの片腕の男に時間を訊かれた時のことだ。あれ以来、時計を見た記憶がない。

胸騒ぎがして、慌ててタカシは店を飛び出した。そして路地裏のゴミ捨て場へ向かった。

片腕の男はそこにはいなかった。

新しい朝日がビルの隙間から差込み、タカシの前にタカシ自身の巨大な影を作っていた。しかし、ひよろりと伸びたその影はとても自分のものようには思えなかった。

タカシはため息をつきながら、その場に座り込んだ。

あの男の言うように、一瞬だけでも抱きしめてやればそれよかったのか？ 合理的に考えれば、カズミの時計とあの片腕の男には何の因果関係もない。頭ではそれは分かっている。でも何故か身体に力が入らない。

そのとき不意に懐の携帯電話が鳴った。

「遅いじゃない？ 仕事、もう終わったんでしょ？」とキョウウコは言った。

「ああ」

「今、何処にいるの？」

「まだ店だよ」とタカシは力無く言った。

「何時だと思ってるの？ 私、もう三十分も此処で待ってるのよ。とにかく早く来て」

電話は一方的に切れた。

キョウウコは待っている。本当は、立ち上がってすぐにも駆け出さなくてはならないのだろう。

しかし、タカシは腰を上げることができなかった。時計はなんとなくもう見つからないような気がする。ひよっとしたら、カズミはもう忘れてもいいよと言いたいのかもしれない。しかし、今はすべてを前向きに受けとめることが出来ない。

タカシは漠然と、これまで無くしてしまったモノたちのことを考えた。既にあまりにも多くのモノを失ってしまった。時間、大切な人、人生、あらゆるものの意味、ユーモア、疾走する機関車のような意志・失ったものはすべて、記憶の中でいつまでも美しいままだ。

片腕の男はもう何処にもいない。

ひとり、ふたりと急ぎ足でタカシの前を通り過ぎていく。どうしたのか、と誰も尋ねたりはしない。こんな路地裏で、失ってしまったモノをひとつひとつ数えている男のことなど、誰も気に留めたりはしないのだ。(了)(10年作・99年加筆修正)